

2020 年 1 月 31 日

2019 年度聖路加国際大学大学院課題研究

診断直後の軽度アルツハイマー型認知症高齢者が語った
心理・社会的体験

The Psychosocial Experiences of Older Adults

Diagnosed with Early Stage Alzheimer's Disease.

17MN307

根岸 由依

【論文要旨】

【目的】本研究は、軽度のアルツハイマー型認知症と診断された本人の体験を記述することを目的とした。

【方法】軽度のアルツハイマー病と診断された高齢者に対して、半構成的インタビューを行う質的記述的分析である。対象者は、65 歳以上の要介護認定を受けていない認知症と診断されて1年以内の者6名であった。令和元年10月～令和2年1月10日までの期間にデータ収集を行い、一人の対象者に対して1回30分程度のインタビューを行った。インタビューデータは、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの方法を参考に分析を行った。本研究は、聖路加国際大学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(承認番号:19-A016)。

【結果】インタビュー内容の分析より、4個のカテゴリーと10個のサブカテゴリー、20個の概念が抽出された。《自分なりの捉え方で受診を受け入れる》体験では、【家族に受診を提案されて連れられてきた】対象者は、【自分なりの受診理由を考える】ことで受診を肯定的に捉え、外来受診につながっていた。《物忘れの自覚と対処をする》体験では、【物忘れを自覚する】ことで、これ以上悪くならないよう【物忘れに対して自分なりの対処をする】。その背景には、【できていないことを気付かれないようにする】という本人の思いがあった。《困ってはいないが、家族に助けてもらい始める》体験は、【生活できている】、【まだ他人の手は借りる必要はない】と捉えている一方で、生活をしていくためには【家族に助けてもらう】必要があると考えていた。《役割や立場を思考する》体験では、【仕事や役割を持ち続けたい】と考えており、【これからのことを考える】ことで残される家族への思いを巡らせていた。

【結論】軽度のアルツハイマー型認知症と診断された高齢者の《自分なりの捉え方で受診を受け入れる》、《物忘れの自覚と対処をする》、《困ってはいないが、家族に助けてもらい始める》、《役割や立場を思考する》という体験が明らかとなった。

診断後支援として①本人の想いや認識を確認しながらその人に会った受診援助方法を考え、早期に外来受診につなげる、②初回の外来受診時には対象の心理状況を理解し、それぞれの対象者が持つ受診に対しての捉え方を把握し、支援のスタートを切る、③本人がどのようにしたら認知症をつきあっていけるのかを一緒に考えていく、④本人の自己決定を支えつつ、自己決定に必要な情報を過不足なく提供する、⑤本人のニーズを適切に把握し、利用できる資源やサービスの情報提供を行う、⑥今まで培ってきたスキルや役割が発揮できる場の提供や社会的交流の場の紹介を行うという支援の方法が示唆された。